

ヨハネの手紙第一

§3 3つの検証の詳細(3:1-4:6)〔その3〕

前回の復習と今回の内容について

1. 私たちはイエスによって罪を取り除かれ、またイエスにあって既に悪魔の業に打ち勝っている。だからこそ、神の子とされた私たちにとっては、義を行う＝正しい生活を送ることこそが自然な状態である。
2. キリストの体である教会は、神の栄光を地上で現していくようにと召されている。すなわち、私たち自身がこの世で正しい生活を送り、神の栄光を現すように召されている。
3. 義の実践、正しい生活にとって最もふさわしい行いこそが、兄弟姉妹で互いに愛し合うことである。
4. ヨハネはこれから、互いに愛し合うということがクリスチャンにとってどれほど重要で、またふさわしいことなのか、論じていく。

§3 3つの検証の詳細(3:1-4:6)〔その2〕

2. 社会的検証：兄弟への愛の実践(3:11-24)

3:11 **互いに愛し合うべきである**ということは、あなたがたが初めから聞いている教えです。

1. 私たちが兄弟を憎むべきではないことの理由
 - (1) 私たちが兄弟を憎むべきではないことの理由は、イエスの教え（掟）にある。
 - (2) イエスの掟は「**古い掟**」でもあり、「**新しい掟**」でもあった（Iヨハ2:7-8）。
2. 「**初めから聞いている教え**」
 - (1) 私たちが「**初めから持っていた古い命令**」（2:7）すなわち「**初めから聞いている教え**」とは、「**互いに愛し合うべきである**」というものである。
 - (2) これはクリスチャンにとって最も基本的な聖書のメッセージのひとつである。
 - (3) これは旧約聖書でも教えられており、新約聖書でもイエスご自身が身をもって教えられた、最も重要な掟である。

3:12 カインのようであってはいけません。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。なぜ兄弟を殺したのでしょうか。自分の行いは悪く、兄弟の行いは正しかったからです。

1. 「悪魔の子」の例としてのカイン

- (1) 兄弟を愛さない者は、神から出た者ではなく、悪魔の子である (3:10)。その最初期の例が、創世記4章に登場しているカインである。
- (2) ヨハネによれば、カインがアベルを殺したのは、自分の行いが悪く、弟の行いが正しかったからである。
- (3) ヘブ 11:4 信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。
- (4) アベルは捧げ物を、羊の初子のなかから最良のものを選んできた (創 4:4)。しかし、カインの捧げ物についてはそのような説明がない。ここで既に、カインとアベルの礼拝の姿勢の違いが暗示されている¹。
- (5) カインは激しく怒り、アベルを殺した。この犯行は、兄弟への憎しみから来ていた。
- (6) 兄弟を憎み、物理的にも彼を殺してしまったカインの姿は、「兄弟を愛する」という神の掟に逆らった悪魔の子の典型例である。

3:13 兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。

1. 「世」がクリスチャンを憎んでも、それは驚くべきことではない。

- (1) ヨハネが言っている「世 *kosmos*」とは、サタンの支配下にあり、神に属さず、御子を信じないこの世のシステムや価値観のことであった (2:15 の学びを参照)。
- (2) 読者たちは、世に属する偽教師・偽信者たちによって苦しめられていた。世に属する人々は兄弟を愛するという掟に逆らっており、カインと同じ性質を持っている。
- (3) だから、世が神に属する者を憎んでも、驚くべきことではない。

3:14 私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。

1. クリスチャンは死から命へ移った。

- (1) 「兄弟を愛している」ことによって、私たちが死から命へ移ったということがわかる。

¹ Multiple Faculty Contributors, “Genesis,” *The Moody Bible Commentary*, eds. Michael Rydelnik and Michael Vanlaningham (Chicago: Moody Publishers, 2014), p. 51.

これは、霊的な死と命のことである。

(2) 私たちが兄弟姉妹を愛しているのは、自分の努力によるものではない。愛を完全に実行された御子を信じ、御子に繋がっているからである。

(3) しかし、世に属する者は御子に繋がっていないため、「**愛さない者**」である。

2. 兄弟姉妹を愛するということは、クリスチャンにとっての当然の性質である。

(1) この教えは、単なる教会のスローガン（標語）や機械的な命令ではない。

(2) 私たちにはこの教えを行う力の源として聖霊が与えられている。だからこそ、このような命令が与えられている。

3:15 兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。

1. 私たちが人を憎むとき、私たちはその人の滅びを願っている²。

(1) カインは兄弟アベルを憎み、実際に彼を殺してしまった。

(2) イエスは次のように教えられた。

マタ 5:21 昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

マタ 5:22 しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会議に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。

(3) 「**能なし *raca***」という言葉は、「頭が空っぽ」という意味の罵倒語である³。また、「**ばか者 *mōre***」という言葉は、相手の心や性格を罵倒する言葉である⁴。

(4) イエスは、自分の兄弟に対して怒りや憎しみをもって罵倒する者は、人殺しと同等であると教えられた。

² 「なぜなら、われわれが憎む時、その人の滅びを願うからである」というカルヴァンの言葉の引用である（訳文はジョン・R・W・ストット『ティンデル聖書注解 ヨハネの手紙』千田俊昭訳 [いのちのことば社、2007年] 160頁より）。

³ Arnold G. Fruchtenbaum, *Yeshua: The Life of Messiah from a Messianic Jewish Perspective*, vol. 2 (San Antonio, TX: Ariel Ministries, 2016), pp. 295–97.

⁴ A. T. Robertson, *Word Pictures of the New Testament*, in PC Software e-Sword X におけるマタ 5:22 の注解を参照のこと。

2. 再び、兄弟を愛さない者が霊的に死んでいるということが強調されている。

- (1) ヨハネは「**愛さない者は、死のうちにとどまっているのです**」ということをし、「**だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです**」と言い換えて強調している⁵。
- (2) かつての私たちもまた、隣人を憎み、その人の滅びを願うようなことのある者であった。また、そのような罪の性質から、まだ完全に抜け出せてはいない。
- (3) しかし、キリストから与えられた新しい性質によって、私たちは主にある兄弟姉妹たちを愛し、さらに信仰を共有してはいない隣人や「敵」でさえも愛そうとしている（マタ 5:43-48；ロマ 12:19-21）。

3:16 キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

1. 再び、クリスチャンが兄弟を愛することは当然であると強調されている。

- (1) 私たちに神の愛が分かったのは、私たちが兄弟を愛することができるようになったからではなく、キリストが私たちのために命をお捨てになったことによる（I コリ 15:3）。
- (2) ここでの「わかった」は体験に基づく知識を示している。
- (3) 私たちは、キリストが自分たちのために死んでくださったのだとわかったとき、何よりも高く深い神の愛を経験した。
- (4) 私たちは愛そのもののお方である神に属している。だから、私たちが兄弟を愛し、彼のために命をも捨てるのは当然のことである。

2. 「**いのちを捨てる**」ということについて

- (1) イエスの御業にも私たちの行いにも使われている「(いのちを) **捨てる tithemi**」という言葉には、「横に置く」という意味があり、ヨハ 10:11 などでも使われている。
- (2) イエスのご自分のことを「**わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます**」と言われた（ヨハ 10:11）。イエスは、ご自分の命よりも羊を優先されたということである。
- (3) イエスはその姿勢を示された上で、「**わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい**」という掟を与えられた（ヨハ 13:34；15:12）。
- (4) 私たちもそれに倣うべきである。この「**べき opheilomen**」という言葉は、「負債を負う」

⁵ ただし、これが「殺人者は救われない」という教えではないことに注意すべきである。

という意味を持っている。神の子となった私たちにとっては、神の子らしく、子の中の子である御子のように、自らの命よりも兄弟姉妹への愛を優先して歩むことがふさわしいのである。

3:17 世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。

3:18 子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。

1. イエスの愛とは、自らの命よりも兄弟を優先するほどの愛である。有限な世の富を兄弟よりも優先するような者に、どうして神の愛が留まっていると言えるだろうか⁶。
2. まことの愛の実践は、口先だけではなく行いによって表される。
 - (1) イエスは実際にご自分の命よりも私たちに優先してまで愛を示された。だから、言葉や口先だけで愛することは、神が意図される愛からはほど遠く、「実のところ全然愛でない」⁷。
 - (2) 言葉によって愛を表現することは重要だが、愛を実践するならば、言葉だけではなく行いによっても表されるはずである。

3:19 それによって、私たちは、自分が真理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。

3:20 たとい自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。

1. 行いと真実をもって兄弟姉妹を愛することにより、私たちは神の御前で平安を得る。
 - (1) 愛の実践により、私たちは自分が真理に属するものであると（体験的に）知り、神の御前で安心できる。
 - (2) しかし、それでも心が自分自身を責めてくることがある。

⁶ 村上宣道「ヨハネの手紙」『新実用聖書注解』宇田進・富井悠夫・宮村武夫共編（いのちのことば社、2008 年）1832 頁

⁷ D・M・スミス『現代聖書注解 ヨハネの手紙 1、2、3』新免貢訳（日本基督教団出版局、1994 年）148 頁

2. 心の責めと全知の神

- (1) 心の責めはいつも正しいとは限らない。それに対して、神は全てをご存知であり、正しく、あわれみ深い方である⁸。
- (2) 私たちが 3:18 のように「**行いと真実をもって**」他者を愛することができていれば、たとい心が責めようとも、すべてをご存知である神が私たちの心をなだめてくださる。
- (3) 私たちが神の御前に平安を得るために、「どんな鎮静剤よりも強いのは、この全知の神に対する信頼なのである」⁹。すなわち、「平安を得る唯一の方法は、神の恵みを信じる『信仰』である」¹⁰。

3:21 **愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、**

3:22 **また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。**

3:23 **神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。**

1. 祈りがかなうということについて

- (1) 祈りがかなえられるということは、自分の意志が神の御心と一致しているということである。
- (2) 自分の意志が御心と一致しているならば、神の命令を実行しているはずである。その命令とは、「**キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うこと**」である。
- (3) 神が私たちを愛し、私たちの内におられるからこそ、キリストのようなまことの愛を実践することができる。
- (4) そのような愛を実践できるなら、地上生活での具体的なことも、御心に沿って行っていくことができる（I コリ 13 章参照）。そして、主の御前に大胆に出ていくことができるだろう。

⁸ 「神は私たちの心よりも大きく」という表現は、神のあわれみ深さよりも神の裁きの厳格さを意味しているのだとする議論がある。しかし、ここでの文脈は「信者は自分の良心に責められたとしても、愛の実践と神の知識により、神の御前で安心できる」というものである。よって、「神は私たちの心よりも大きく」という表現は、神のあわれみ深さを強調している表現だと捉える方が妥当であるものと考えられる。詳しい議論については以下を参照のこと。ストット、166-67 頁；Hiebert, p. 314.

⁹ ストット、165 頁

¹⁰ 中川健一『ヨハネの手紙第一「救いの確信を得る喜び」』2016 年聖書フォーラムキャンプ配布資料（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ、2016 年）16 頁

2. 祈りの性質

- (1) 祈りとは、自分の内から出てくる願い事を並び立てることではない。
- (2) 祈りの中では、私たちの内におられる聖霊に心を委ね、既に与えられている真理（御言葉）を基準にして御心を求めていく。
- (3) I ヨハ 3:21-23 が教えているのは、神の命令を守れば願い事が適うという御利益信仰的な教えではない。
- (4) 私たちが神の命令を守っているなら、私たちの祈りは御心と一致している。その順番を間違えてはならない。

3:24 神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人の中におられます。神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知なのです。

1. 私たちは神の内におり、神もまた私たちの内におられるという教え

- (1) ヨハネの福音書 15:1 以降の「ぶどうの木とその枝のたとえ」では、私たちがイエスに留まり、イエスが私たちに留まるなら、私たちの行いは実を結ぶのだと教えられている。ここでの教えの内容もそれと同じである。

2. 私たちが神に留まり、神も私たちに留まっておられるということは、私たちに与えられた聖霊の働きによって知ることができる。

- (1) これは私たち個人の主観に頼っているように見えるが、実はそうではない。
- (2) 私たちは聖霊の働きによってイエスを受け入れ、神の御子として告白した（4 章以降で詳しく学ぶ）。
- (3) イエスを信じた結果、救いの保証として私たちの内に聖霊が与えられた（エペ 1:14）。
- (4) 聖霊の助けにより私たちは変えられ、神の命令を守る力が与えられる（エゼ 36:26-27）。
- (5) 聖霊の働きは、御心に沿った行いの実という、客観的な事実として現れる¹¹。
- (6) 聖霊の内住、実を結ぶ行い、私たちがイエスに留まること、イエスが私たちに留まること……これらは全て、ひとつの文で表すことが難しいほど密接に結びついている。

¹¹ ストット、170 頁

まとめ

1. 私たちは、御父、御子、御霊という三位一体の神が、今この瞬間にも私たちそれぞれのために働きかけておられることを意識し、主を賛美しよう。三位一体の神の愛という真理こそが、私たちがキリストのように互いに愛し合おうとするときの動機やモチベーションになっていくのである。
2. 私たちが愛の命令を実行できているとき、私たちは賛美のうちに主の御前に大胆に出ることができ、御心に沿った祈りをささげることができるだろう。この喜びは、私たちをさらなる愛の実践へと導いていく。
3. 今日、ヨハネの手紙を学んだことをきっかけに、このような「キリストの愛の好循環」へと入っていこうではないか。